

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520383

研究課題名（和文） 超域する「異界」—異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として—

研究課題名（英文） Exploring *Ikai* as a Bridge between Intercultural Studies, Japanese Teaching and Ecological Education

研究代表者

大野 寿子 (ONO HISAKO)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：20397491

研究成果の概要（和文）：「異界」を、「死後世界」および「時間的空間的に異なった領域」をも指し示す、古来より現代に至る人間の精神生活の「影」、「裏」、「奥」に存在しうる空間領域と定義し、その射程をクロスジャンルの比較考察した。文字テキストのみならず、音楽・図像における「異界」表現、精神生活内の「異空間」としての「異界」、仮想空間、コミュニケーション上の他者としての「異界」等、「異界」という語と定義の広がりとその広義の「異界」に潜む、何でも「異界」にしてしまう現代日本語の危険性を考察した。

研究成果の概要（英文）：The Japanese term *ikai* (異界) has been variously described as “post-mortem existence” or “alternative spatial-temporal domains” that appear to exist as mere shadows. From ancient times to our current age, *ikai* have been interpreted as part of our inner existence and mental life, in contrast to the outer world. *Ikai* are a rich source for inter-disciplinary studies. For example, references to *ikai* appear not only in written texts but also in music and iconographic images as well as virtual spaces. The term *ikai* is being used in so many different ways in Japan today that much of its original nuance appears to be fading.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：伝承文学、異界、魔女、自然、怪異、音楽、絵画、コミュニケーション

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 異界の多様性とそのテキストの広範さ：ヨーロッパ伝承文芸、とりわけドイツにおけるグリム・メルヒェン（便宜上民間伝承の枠内で考える）において「異界」とは、多くは「森」という場で表現され、「魔女」（転落させられた土着の神々）（上山安敏）や、「巨人」、「小人」（「ゲルマン・北欧神話に源を発するもの」）（J・グリム）が住まう空間として描かれている。このような「異界」は、ドイツ伝承文学研究においては *Jenseits*（彼岸）と表現され、「遠方世界」、「天上世界」、

「地下世界」の三つのバリエーションが指摘されて久しい（M・リュートイ）。これらの「異空間」は、比較民話学および伝承文芸の民俗学的方法論に照らしてみるとさらに、「森」のみならず「山」、「海」という外的自然に形象化され、伝承文芸のみならず、その伝承を受容した形でさまざまな文学作品、劇作品に表れている（ドイツ・ロマン派においては「森への憧憬」、日本近世文学においては「山気」なるもの）。さらに「異界」の概念規定においては、夕暮れや明け方を指す *Zwielicht*（薄明かり）すなわち、昼と夜の二世界の間

の時間帯もが考慮されなければならない(日本では「大禍時」あるいは「逢魔刻」)。

(2) **異界の定義の曖昧さ**: 伝承文芸における「異界」は、比較民話学でテーマ化されてはいるものの、日本文学のとりわけ中古、中世、近世の文学作品における伝承文芸受容の系譜をも視野にいれた、「異界」および「異界」に属するもの研究が、積極的になされているとは言いがたい。ヨーロッパ文学における「異界」もまた、東洋との比較文化学において、再規定されてしるべきと思われる。

(3) **異界という語の新しさ**: 本来「異界」という語は日本民俗学用語ではなく(折口信夫、柳田國男にはほぼ皆無)、ファンタジー研究分野から民俗学へと借用された語であると小松和彦は指摘する。しかし、日本におけるファンタジーおよびメルヘン研究分野においても「異界」という語の使用例は近年において増加傾向にあり、小松の指摘には若干の疑問が残る。「異界」という語は、例えばH・パッチの「中世ヨーロッパ人の現実世界を取り囲んでいる別世界」を意味する“the other world”の翻訳語として1970年代後半から1980年代前半にかけて登場し、それ以降日本語に定着してきた語である可能性が高いことがわかってきた。中世ヨーロッパの二元論的宇宙観を指すべき翻訳語が、日本古来の死者世界である「他界」等の語義を取り込み、1980年代以降の日本社会において、構造主義的な二項対立の図式をも引きずりながら独自に発展した語、すなわち、ヨーロッパと日本の「いにしえ」の精神世界を、超域的に、かつ現代からの目線でも再構築しうる語ではないかとの可能性が、共同研究準備段階で指摘された。

## 2. 研究の目的

(1) ヨーロッパにおける異界としての「森」のトポス、日本における「山」のトポスの古代から現代にいたるまでの変遷を考察の中心にすえ、その変遷の背後に隠された「信仰」の対象としての自然、すなわち、人間と自然との精神的営為の普遍性を再確認する。すなわち、伝承文芸あるいは文学作品や劇作品における「異界」という表象を、ドイツを中心としたヨーロッパ文学文化学と日本文学文化学の領域より検証し、「異界」概念規定において不可欠な生死観および自然観をインター・カルチュラルな視点より考察する。

(2) 「異界」が自然の一部に、自然信仰を通じて重なり合うという西洋東洋共通の観点から、「畏敬の対象」としての自然観あるいは「異界」観が、現代社会のエコロジー教育に寄与しうる道を考察する。すなわち、実践的な「自然との共生」教育に、「畏敬の対象としての森あるいは山」という精神文化史的観点を導入するという、伝承文芸を用いたエコロジー教育の可能性を探る。

(3) (2) 西洋的「異界」にまつわる表象の一つである「魔女」を中心に、“Hexe”(ドイツ語)、“witch”(英語)、“sorsière”(フランス語)などが「魔」と「女」という漢字を使い「魔女」という訳語が形成される土台となった、近代日本における西洋文化受容のみならず、仏教伝来時の仏法用語としての「魔」に立ち戻り、「魔」的なものの世俗化および、日

本古来の「異界」的なものとの混交過程を考察し、さらに、外国文学文化研究からみた日本文学文化研究および国語教育の一つのあり方を提案する(「こびと」についても同様に考察する)。

(4) 言語テキストに表れる「異界」のみならず、造形芸術および音楽表現における「異界」のあり方をクロスジャンルの分析し、その相互影響性を考察するとともに、「異界」、「自然観」、「魔」のインターカルチュラルな比較考察を土台とした、美術あるいは音楽教育の実践の可能性を探る。

(5) 研究代表者(大野)は、2006-2008年度科学研究費補助金交付による研究「森と人間の文化史—伝承文学研究とエコロジー教育の接点—(基盤研究(C)、課題番号18520191)において、グリム・メルヘンにおける「森」を、グリム兄弟の理念における「根源」の総体として普遍的に捉え、その事実を、兄弟の学術著書にまで視野を広げた総合的な研究により実証し、かつ、「グリムの森」による「森のエコロジー教育」の提案を行ってきた。本研究は、上述の先行研究の延長線上に位置し、グリム・テキストに表れる森への憧憬および「異界」としての森のみならず、「異界」そのものが、自然信仰を通奏低音とするかたちで普遍性を有し、学際という概念を越え、様々な研究分野に普遍的に存在しうる研究テーマであることを証明する。

## 3. 研究の方法

(1) **メンバー**: 本研究は、研究代表者(大野寿子)と連携研究者4名、研究協力者2名でスタートし、最終年度には、連携研究者12名(竹原威滋、山田利明、千艘秋男、中山尚夫、野呂香、山本まり子、渡辺学、石田仁志、木村一、溝井裕一、高橋吉文、河地修)、研究協力者(早川芳枝、池原陽斉、松岡芳恵、藤澤紫)4名、計17名で構成される共同研究となった。

(2) **担当**: 大野、竹原、溝井、山本、渡辺、高橋が、ドイツ言語文化およびヨーロッパ文学文化分野担当を担当。千艘、中山、石田、河地、木村、野呂、藤澤、早川、池原、松岡が、日本語、日本文学文化分野を担当。とりわけ、日本文学文化分野においては、千艘、野呂、河地が古代から中世を担当し、池原が中世から近世、中山、松岡が近世、さらに石田、早川が近現代を担当する。特に翻訳語の成立、社会言語学、および語誌関連においては、日本文学文化分野とヨーロッパ文学文化分野の協力が不可欠であり、木村を中心に、大野、渡辺、石田、早川、池原が共同で検証した。また、比較伝承文学の分野では竹原、溝井が、国語教育と本研究との関わりに関しては、千艘、中山、木村、石田が、思想分野およびエコロジー教育への橋渡しについては高橋、大野が中心となった。さらに、音楽学および音楽教育分野では山本が、美術史においては藤澤が担当した。

(3) **研究会とシンポジウム**: 2009年度・2010年度は、東洋大学で研究会を6回行った。各々の専門の立場から「異界」をテーマとした研究発表を行い、共同研究ベースとしての共通理解を深めた(研究会詳細は研究成果欄に記す)。研究会での研究成果を、2011年度(最終年度)に3回のシンポジウムを開催するかたちで公開し、研究者、学生、一般参加者と意見交換をした(シ

ンポジウム詳細は研究成果欄に記す)。

(4) **プロセス1** : 森に住む異界の住人という枠組みでもともと抽出された「魔女」について、大野の先行研究(課題研究番号18520191)の枠組みですでに、現代日本における概念規定調査が進んでいる。明治初期の“Hexe”の訳語として候補に挙がっていた「魔女」、「鬼婆」、「妖婆」などの現代のイメージを知るために、東洋大学において大野が担当した授業受講者に、「魔女」のイメージ、「魔」女、「鬼」女、「妖」女という三つの表象のイメージ比較のアンケート調査を実施し、現代日本の魔女像の分析をした。明治初期から大正時代にかけての“Hexe”や“witch”の翻訳の精査、「魔」という漢字が有する歴史的意味合いについての調査からみえてきた、少なくとも日本の文化史における「異界」と「森(杜)」、「林」という「木」のある風景(あるいは自然)との密接な関連性を、テキスト・イマネントな方法論で検証し、まとめていった。

(5) **プロセス2** : 「異界」という表現が日本の文字テキストに頻出してくる1970年代後半から1980年代前半にかけての時代背景を考慮しつつ、語誌の立場からさまざまな文字テキストを精査し、「異界」という語の用法とそのコンテキストを分析した。

(6) **プロセス3** : ドイツ文学あるいは哲学における、自然哲学が19世紀のドイツ・エコロジー論に与えた影響を考察した。シェリングあるいは、ヘルダー、フンボルト、ゲーテの影響はすでに取りざたされているが、そこに介在しているはずのグリム兄弟の功績を調査し、「森」や自然がよく登場するグリム・テキストの新たな角度からの再分析を試みた。

(7) **プロセス4** : 音楽学の分野、美術史の分野での文字ではない「異界」表現を、グスタフ・マーラー作品における「異界」表現(山本)、浮世絵における「死」あるいは「幽霊」にみる「異界」表現(藤澤)について、研究会等を通じ共通認識を深め、文字・音楽・画像テキストに共通に存在する「異界」表現を分析し、その「超域」のあり方を議論した。

(8) **プロセス5** : コミュニケーションにおける他者の存在、現代において過去に思いを馳せるときに出現する仮想過去、アミューズメントパークやアミューズメント系飲食店でテーマとなる非日常性、ネット上の仮想空間等を「異界」の一部と見なすときの問題点を各専門の立場から議論した。

#### 4. 研究成果

(1) **概要** : 7名でスタートした共同研究であるが、年を追うごとに特に芸術分野や日本文学、中国文学、ドイツ文学等諸分野の研究者を連携研究者や研究協力者として加えていき、最終年度は連携研究者12名、研究協力者4名、計17名の共同研究となった(メンバーについては研究方法の欄を参照のこと)。「異界」という一見伝統的にみえるが、70年代以降の造語でさまざまな研究分野を再検討および再構築するという作業を行なうその研究会で、クロスジャンルのかつ学際的で有意義な意見交換ができ、さらに共同論文集『超域する異界』(勉誠出版より2012年度末に刊行予定)の執筆という研究成果を導くことができた。同書刊行に際しては、2012年度JSPS研究成果公開促進費と2012年度

東洋大学井上円了記念助成金(刊行助成)を獲得した。

#### (2) 研究会

①**第一回研究会**(2009年8月6日、於東洋大学)では、連携研究者竹原が「異界が人間界に超域する時空間—世界の伝承説話『瘤取りオニ』をめぐって—」という題目で比較民話学の立場から研究発表を行い、ヨーロッパ伝承文芸では「小人」に与えられている機能を日本の伝承文芸では「オニ」が担う等、文化圏による表象の相違はあるものの、「異界」という概念は普遍的であるという理解に至った。

②**第二回研究会**(2009年9月14日、於東洋大学)では、連携研究者山本が「音楽における異界—異形のもの、異空間、超域の音楽表現—」という題目で研究発表し、異界の音楽表現について、とりわけドイツ・ロマン主義音楽を中心に解説が成された。誤訳における「魔王」のイメージ定着や楽劇『ヘンゼルとグレーテル』の原作(グリム童話)との相違等に焦点が当てられた。

③**第三回研究会**(2009年12月12日、於東洋大学)では、2人のゲストスピーカー(2010年度より2人とも連携研究者と研究協力者となる)の研究発表(溝井裕一氏:「魔術師ファウスト—悪魔と旅する近世ドイツ—」、松岡芳恵氏:「日本近世文学における“怪異”の変遷—化け物(妖怪)・百物語を中心に—」)を拝聴し、西洋と東洋の異形のものの特徴、および、異界との関わり方(コミュニケーションのとり方)のドイツと日本の文化に根ざした独自性と普遍性を確認し、「異界」の「超域」という現象の捉え方に共通理解を持つ事ができた。これらの研究発表は次年度に企画予定のシンポジウムに繋がる布石となった。

④**第四回研究会**(2010年6月6日、於東洋大学)では、研究協力者池原が「「異界」の意味領域」という題目で、現代日本の出版物における「異界」という語の意味範囲の、個々の事例、使用例からの調査報告を行った。「異界」という語が、「他界」等の民俗学分野における用語の意味範囲を拡大かつ継承しつつも、実際には1970年代末に日本語として登場した、the other world等の翻訳語である可能性が高いことを確認した。

⑤**第五回研究会**(2010年9月25日、於東洋大学)では、ゲストスピーカー高橋吉文氏(2011年度より連携研究者となる)の「漱石越境—おむすびころりん、おくびもころりん」という研究発表を拝聴した。源氏物語、夏目漱石作品、さらに西洋絵画等における「異界」表出の仕掛けには、「赤」、「首(あるいはそれに類するもの)が落ちる」等の定式化されたルールがあることを学んだ。

⑥**第六回研究会**(2011年2月17日、於東洋大学)では、連携研究者渡辺と山田がそれぞれ研究発表を行った。渡辺の研究発表「「異界」の思想—メディア、テクノロジー、言語に触れて—」は、現代日本と現代ドイツにおける言語と社会との関わりにおける「異界」のあり方を、「ゴスロリ」「コスプレ」等の個々の若者文化(社会現象)に基づき考察したものであり、異文化理解の新しいあり方を学ぶことができた。山田の研究発表「鬼(き)を責める」は、古代中国道教思想において病気等をもたらすとされた「鬼(き)」と、それを封じ込めるために存在したとされる「劾鬼」という現象について説明し、「該鬼」現象がおそらくは仏教との混交によ

り衰退していく過程を文献学的見地から考察したものであり、東洋における異界表象の一つである「鬼」をめぐる死生観のあり方を学んだ。

(3) **シンポジウム**：「異界」(die andere Welt, the other world) という語を、「死後世界」(あの世、他界等)のみならず「時間的空間的に異なった領域」(ユートピア、マクロコスモス、異文化、非日常空間、空想世界等)をも指し示す、古来より現代に至る人間の日常生活および精神生活の「影」「裏」「奥」に存在しうる必要不可欠な空間領域と定義し、最終年度2011年度に3回のシンポジウムを開催した。すべてのシンポジウムで参加者アンケートを実施し、シンポジウムの感想、参加者それぞれの「異界」のイメージ等を調査したのだが、その分析結果の開示は紙面の都合で割愛する。

①**第一回シンポジウム総合テーマ**：「異界」へのいざない—ドイツ、日本、中国の文学・音楽から—(聖徳大学言語文化研究所第136回公開研究発表会として、2011年6月5日開催、於聖徳大学)。パネリスト4名(山本、溝井、河地、山田)、コメンテーター2名(竹原、高橋)、コメンテーター兼司会(大野)。発表1：異界への越境の音楽表現—グスタフ・マーラーを中心に—(山本)、発表2：ドイツの民間伝承における異界と異人—ハーメルンの笛吹き男からメフィストフェレスまで—(溝井)、発表3：日本の古典文学における異界への越境とその仕掛け—『源氏物語』『夕顔』巻の場合—(河地)、発表4：中国の古典文献にみる異界と異人—道教「神仙説」を中心に—(山田)。上述の「異界」定義にしたがい、その「異界」の表れ方、「異界」に属するもの、「異界」への越境の仕掛け等を、ドイツ、中国、日本の文芸作品において比較検証するとともに、文字テキストのみならず音楽テキストにおける「異界」表現にも言及し、「異界」の持つ普遍性と地域性、表現の可能性とその限界とを、学際的視野より比較考察した(参加者76名、内アンケート協力59名)。

②**第二回シンポジウム総合テーマ**：「異界」へのいざない—比較文学文化の視点から—(東洋大学日本文学文化学会2011年大会内で、2011年7月9日開催、於東洋大学)。パネリスト4名(竹原、松岡、藤澤、石田)、コメンテーター1名(中山)、司会2名(大野、木村)。発表1：民話における「異界」との交流を可能とする仕掛け(竹原)、発表2：黄表紙における「異界」表象(松岡)、発表3：描かれた「異界」—日本の造形文化と異界表現—(藤澤)、発表4：現代日本文学における「異界」の諸相—(石田)。上記の「異界」定義をふまえクロスジャンルの、伝承、草双紙(絵本)、絵画、小説といった時代も文化圏もメディアも異なる四つのテキストをてがかりに、「異界」の現われ方を多角的視野より比較考察し、我々の心の中の「異界」のあり方やその必要性を共に考えた(参加者160名弱、内アンケート協力84名)。

③**第三回シンポジウム総合テーマ**：「こびと」という異界—現代文化と自然との関わりから—(東洋大学人間科学総合研究所公開シンポジウムとして2011年12月17日開催、於東洋大学)。パネリスト4名(池原、大野、ゲストスピーカー信岡朝子氏〔東洋大学専任講師〕、大村達郎氏〔宮本記念財団研究員〕)、コメンテーター1

名(竹原、司会(石田))。発表1：「異界」の意味領域—言説史の観点から—(池原)、発表2：『借りぐらしのアリエッティ』にみる「こびと」像—英国ファンタジーとジブリ映画のはざま—(信岡)、発表3：グリム童話『白雪姫』にみる「こびと」像—北欧・ゲルマン神話とディズニー映画のはざま—(大野)、発表4：「小女子」譚にみる日本の「こびと」像—御伽草子「一寸法師」と昔話研究を中心に—(大村)。「異界」の意味領域を言説史より再定義し、イギリス児童文学におけるこびとをシェイクスピア妖精定義を視座に、グリム童話におけるこびとを神話との関わりから概観し、日本の「小女子譚」の分布とその研究誌を概観し、日英独のこびと表象を現代日本の「こびとづかん」へと向かって比較考察した(参加者100名強、内アンケート協力93名)。

(4) **共同論文集『超域する異界』刊行にむけて**：一方から他方を見つめるとき、自分から他者を遠心的眼差しで見つめるとき他者を「異界」あるいは「異界にぞくするもの」とする考え方が一方で、自己と他者の間を了解させるために用いられる、自己の延長線上と他者の延長線上に交差する、どちらでもない、そしてどちらでもある空間を埋める語としての「異界」という考え方も成立しうる。すなわち、異文化間(intercultural)の“inter”な部分のことである。前者の考え方にたてば、人間(あるいは自分)は異界へと越境する、あるいは異界というあちら側がこちら側へと侵入するなどの表現が可能で、そこには小松和彦の言うように「境(境界)」がときには明確に、ときには不明瞭に存在しているのであろう。他方、後者の“inter”な視点にたてば、双方の境は確かに存在はしているのであるが、視点がさらなる第三者的視点にたつ、あるいは双方の関係を鳥瞰的に見つめていることにもなり、超域的空間あるいは超域的視点の出現も可能となろう。本共同研究においては各分野の研究者が、個々の目線に立てば学際あるいは越境という表現がふさわしいだろうが、「異界」というテーマのもと、越境に越境を重ね、鳥瞰的視座にたち、個々の研究を見つめ直すという立場を確立していった。その結果、現実世界ではない非現実世界としての「異界」、異文化としての「異界」、異なる研究分野としての「異界」、他者としての「異界」など、「異界」という語と定義の広がり、その広義の「異界」に潜む、なんでも「異界」といえるという現代日本の抱える表現としての危険性を再認識できたといえよう。しかしながら、現代日本の精神生活においては、現実逃避あるいは空想というかたちで「異界」が現実の影に寄り添うようにして存在している事実は否めない。本研究の研究成果は、「異界」の広がりを検証しその超域という概念での再定義を試みることができたところにあるが、3年間の研究の限界は、それでも「異界」がなぜ存在しうるかの根本を明確に突き止めることができなかったところにある。共同論文集刊行の後、本研究の第二段が開始できれば幸いである。

【目次】

はじめに【大野寿子】

第一章 西洋における伝統的な異界とその表現—ドイツ伝承文学・比較民話学・音楽学—

1. 民話における「異界」との交流を可能とする仕掛け【竹原威滋】
2. ドイツの民間伝承における異界と異人【溝井裕一】
3. 『グリム童話』における死者の化身と死者世界—「異界」をめぐる一考察—【大野寿子】
4. グスタフ・マーラーにみる「異界」と越境の音楽表現【山本まり子】

## 第二章 東洋における伝統的な異界とその表現—中国古典文学・日本近世文学・美術史—

1. 神仙隧道—中国的異界のトポグラフィ—【山田利明】
2. 弥次喜多の旅は異界への旅か—『東海道中膝栗毛』の一つの読み方—【中山尚夫】
3. 黄表紙における異界表象—山東京伝『箱入娘面屋人魚』を例として—【松岡芳恵】
4. 描かれた「異界」—江戸時代絵画と異界表現—【藤澤紫】

## 第三章 近現代日本における総合体としての異界とその表現—日本語学と日本文学の一九～二一世紀—

1. 句から語へ—「魔ヲ使フ女」から「魔女」を一例として—【木村一】
2. 歴史と異界の交錯—中里介山「夢殿」論—【早川芳枝】
3. 現代日本文学における「異界」の諸相—村上春樹から現代ホラー小説、家族小説、戦争文学まで—【石田仁志】

## 第四章 現代日本における異界思想とその超域—語誌研究・社会言語学・メディア論—

1. 「異界」の諸相—語誌の展開をめぐる—【池原陽斎】
2. 「異なるものとの交流」としての異文化コミュニケーション【渡辺学】
3. 超域する「異界」とは何か?—Meta2の冒険【高橋吉文】

おわりに【大野寿子】

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計40件)

- ①野呂香：日本古代文学と〈異界〉—異界往来における和歌の役割—、東洋大学人間科学総合研究所「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、査読有、2012年3月、191-204頁
- ②高橋吉文：Hypotheses fingo (仮説を虚構する)—ルーマンの不確定性三変化 その1、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院「メディア・コミュニケーション研究」[リスク・シンポジウム特集：遍在するリスク]、61号、査読有、2011年11月、57-108頁
- ③野呂香：日本古典文学における〈林〉の変遷—前編—(共著者：早川芳枝・古田正幸)、東洋大学人間科学総合研究所「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第13号、査読有、2011年3月、213頁～236頁ほか5本
- ④溝井裕一：グリーンマンと中世の森、説話・伝承学会「説話・伝承学」第19号、査読有、2011年3月、195-212頁
- ⑤溝井裕一：『野獣の主』伝承とヨーロッパの狩猟文化—ドイツ語圏を中心に、日本昔話学会、「昔話—研究と

資料」第39号、査読有、2011年3月、166-182頁ほか1本

⑥渡辺学：「異界」を照らす「ことば」—言語論的異界研究緒論、立教大学ドイツ文学論集「ASPEKT」第44号、査読有、2011年3月、37-81頁

⑦木村一：『日葡辞書』と『日仏辞書』のヘボン参照の可能性をめぐる、近代語学会「近代語研究」第15集、査読無、2010年10月、3-24頁

⑧山本まり子：グスタフ・マーラーと伝承文芸、聖徳大学「聖徳大学研究紀要—児童学部 人文学部 音楽学部—」第20号、査読有、2010年3月、65-72頁

⑨大野寿子：日本の近世文芸における「魔」の系譜—翻訳語「魔女」成立への架け橋として—(共著者：松岡芳恵)、東洋大学人間科学総合研究所「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第12号、査読有、2010年3月、99-115頁

⑩大野寿子：日本における〈森〉の系譜(近世近現代編)—漢字文化受容から西洋文化受容へ—(共著者：石田仁志、松岡芳恵、早川芳枝)、東洋大学人間科学総合研究所「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第12号、査読有、2010年3月、139-162頁

⑪大野寿子：日本における〈森〉の系譜(古代中世編)—漢字文化受容を中心に—(共著者：千艘秋男、池原陽斎、野呂香)、東洋大学人間科学総合研究所「東洋大学人間科学総合研究所紀要」第12号、査読有、2010年3月、117-138頁

⑫山本まり子：ドイツ・ロマン主義オペラにみる魔力の系譜—「自然」と「超自然」の構図から—、聖徳大学音楽学部・大学院音楽文化研究科紀要「音楽文化研究」第9号、査読有、2010年3月、51-56頁

⑬渡辺学：言語研究の受信と発信について—ドイツ言語学と現代思想の一要請として—、学習院大学ドイツ文学会「学習院大学ドイツ文学会研究論集」第14号、査読有、2010年3月、79-99頁ほか1本

⑭大野寿子：グリム兄弟における「小人」像—メルヘン、伝説そして神話をてがかりに—、東洋大学文学部紀要「文学論藻」第84号、査読無、2010年2月、53-81頁

⑮大野寿子：死者への祈りとしてのグリム童話—ヤーコプ・グリム『ドイツ神話学』をてがかりに—、勉誠出版「アジア遊学」[特集：古代世界の靈魂観]、128号、査読無、2009年12月、148-159頁

⑯木村一：C. M. ウィリアムズの日本語研究資料、日本英学史学会「英学史研究」第42号、査読有、2009年10月、137-159頁ほか3本

⑰大野寿子：グリム兄弟と森のエコロジー—『古いドイツの森』序文をてがかりに—、岩波書店「思想」7月号[第1023号]、査読無、2009年7月、177-200頁

〔学会発表〕(計19件) 研究会、シンポジウムでの各発表も集計にいれるが詳細は研究成果を参照のこと

①木村一：ふたつの訳通類略、中部日本・日本語学研究会第57回、2010年10月2日、於刈谷産業振興センター

②山本まり子：シューベルトの《魔王》—鑑賞教材を通じて形成された作品像—、日本音楽教育学会第41回大会、2010年9月26日、於埼玉大学

③山本まり子：ロマン主義オペラにおける「魔」のキャラクター——ドイツとイタリアの比較を中心に——、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE 2010年度第5回オペラ／音楽劇の総合的研究プロジェクト研究会、2010年7月28日、於早稲田大学

④山本まり子：グリム、ベヒシュタインからマーラー《嘆きの歌》へ——テキスト改変の起点としての作品論一、日本独文学会 2010年春季研究発表会、2010年5月29日、於慶應義塾大学

⑤山本まり子：オペラ《ヘンゼルとグレーテル》に見るもうひとつのメルヒェン——劇展開の鍵を握る魔女の視点から——、グリムと民間伝承研究会第48回例会、2009年5月9日、於明治大学

〔図書〕(計13件)

①大野寿子〔編〕：勉誠出版、超域する異界(共著者：池原陽斉、石田仁志、木村一、高橋吉文、竹原威滋、中山尚夫、早川芳枝、藤澤紫、松岡芳恵、溝井裕一、山田利明、山本まり子、渡辺学)、2012年刊行予定、頁数未定

②溝井裕一：関西大学出版部、顔をみること(共著者：伊藤誠宏、柏木治、浜本隆志、森貴史)、2012年3月、3-32頁

③溝井裕一：明石書店、ヨーロッパ・ジェンダー文化論(蜷川順子編)、2011年4月、142-187頁

④大野寿子：郁文堂、黒い森のグリムドイツ的なフオークロア【普及版】、2010年4月、353頁

⑤木村一：朝倉書店、日本語概説—日本語ライブラリー—、(共編著者：沖森卓也、井島正博、笹原宏之、木村義之、阿久津智)、2010年4月、168頁

⑥溝井裕一：関西大学出版部、異界が口を開けるとき(浜本隆志編)、2010年3月、117-172頁

⑦溝井裕一：文理閣、ファウスト伝説—悪魔と魔法の西洋文化史、2009年8月、249頁

⑧木村一：明治書院、みんなの日本語事典(共編著者：中山緑朗、陳力衛、木村義之、飯田晴巳)、2009年6月、507頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大野 寿子(ONO HISAKO)  
東洋大学・文学部・准教授  
研究者番号：20397491

### (2) 研究分担者 (0)

### (3) 連携研究者

石田 仁志(ISHIDA HITOSHI)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：80232312

河地 修(KAWAJI OSAMU)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：60120333

木村 一(KIMURA HAJIME)  
東洋大学・文学部・准教授  
研究者番号：90318303

千艘 秋男(SENSO AKIO)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：20103575

高橋 吉文(TAKAHASHI YOSHIFUMI)  
北海道大学大学院・メディア・コミュニケーション研究院・特任教授  
研究者番号：20091473

竹原 威滋(TAKEHARA TAKESHIGE)  
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員  
研究者番号：50032454

中山 尚夫(NAKAYAMA HISAO)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：70120342

野呂 香(NORO KAORI)  
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員  
研究者番号：20528781

溝井裕一(MIZOI YUICHI)  
関西大学・文学部・准教授  
研究者番号：6055132

山田 利明(YAMADA TOSHIAKI)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：30104897

山本 まり子(YAMAMOTO MARIKO)  
聖徳大学・音楽学部・教授  
研究者番号：00383448

渡辺 学(WATANABE MANABU)  
学習院大学・文学部・教授  
研究者番号：00175126

### (4) 研究協力者

早川 芳枝(HAYAKAWA YOSHIE)  
東洋大学・文学部・非常勤講師

藤澤 紫(FUJISAWA MURASAKI)  
東洋大学・文学部・非常勤講師

池原 陽斉(IKEHARA AKIYOSHI)  
東洋大学大学院・文学研究科・博士後期課程3年

松岡 芳恵(MATSUOKA YOSHIE)  
東洋大学大学院・文学研究科・博士後期課程3年